2005年(平成17年)3月26日 土曜日　第18707号　日刊

熱帯魚受難の年

過去10年で「凍死」最多　黒潮大蛇行が影響

京大実験所調査

黒潮大蛇行の影響で田辺湾の海水温が下がり、「凍死」する熱帯魚の数が過去10年間で最も多かったことが、白浜町の京都大学瀬戸臨海実験所の田名瀬英朋助手（63）と久保田助教授（53）の調べで分かった。田名瀬助手は「数匹単位の打ち上げは毎年あったが、これほどの頻度と数は珍しい。今年は熱帯魚『受難の年』だ」と話している。

田名瀬助手らは同実験所周辺の浜辺を毎日訪れ、流れ着いた魚介類を回収して調査研究している。「凍死」した魚の打ち上げは1月下旬から始まり、ほぼ毎日、数匹から数十匹の割合で3月上旬まで続いたという。

田名瀬助手によると、最も多かったのは2月5日(28匹)と6日(48匹)。体長11～18㌢のツマジロモンガラが中心だった。県水産増養殖試験場（田辺市目良）が天神崎で計っている定置水温が2月4～7日に12・0～12・1度という低水温で推移しており、時期的にも一致している。

また、久保田助教授のデータでは、2月8日にツマジロモンガラ9匹と小型ウツボ。10日にはネッタイミノカサゴ、キリンミノ、アミメウマヅラハギなど15匹の熱帯魚を確認している。13日には体長1・5㍍もあるオナガウツボがひん死の状態で打ち上がり、水槽に移したが4日後に死んだ。

久保田助教授は「このまま大蛇行が続けば、来年の熱帯魚の数にも影響してくる可能性がある」と話している。

低水温で死んだ熱帯系の魚たち
（白浜町の瀬戸臨海実験所で）